

ブロニスワフ・ピウスツキの古蠟管 —— 黒田信一郎へのレクイエム ——

和田 完

1977年春、北大北方文化研究施設の助教授であった黒田信一郎から久しぶりの電話がある。彼の電話はあまり知的な用向きでないことが多いのだが、案の定東京からの大事な客人があるから車を出せとのこと。客は誰かと聞いただと黒田と彼の同僚の井上紘一が東京外語大以来の恩師と仰ぐ徳永康元だという。同氏とは一二度研究会でお目にかかっていた上、氏の有名な蔵書をご自宅で拝見させていただいたこともあり、二つ返事で運転手を引受ける。

同年四月初旬、いまだ残雪の深い中山峠を越え、徳永、黒田、井上を乗せて道南地方への二泊三日のドライブ旅行が始まった。登別、オロフレ峠、洞爺湖といったお決まりの観光地をまずまずの天候に恵まれ通過するのだが、碩学な三人の学徒の関心は専ら北方研究へと向けられていた。いつしか秀麗な羊蹄山を車窓から望む頃、話題は北海道の北方研究、とりわけアイノロジストの最大の弱点である文献学的研究の話となる。シュレンク、シュテルンベルク、クセノフォントフ、ボゴラス、次々と口を衝いて出る名号で狭い車内は熱気を帯びる。もちろん後日深く関わることになるブロニスワフ・ピウスツキの名前は真先に上るのだが、この時我々の通った道筋と1903年ピウスツキが蠟管蓄音機を携え同邦の民族学者シェロシェフスキと歩んだ道とが交差していたことは知る由もなかった。[ピウスツキの北海道調査旅行については吉上昭三の「ブロニスワフ・ピウスツキ、北海道以後」(国立民族学博物館研究報告別冊 5号, 1987年)に詳しい]

この小旅行で組上に上った「何か新しい研究の計画」は旅のつれづれのなせる業と思って気にも懸けていなかったのだが、同年の夏奇しくもアダム・ミツキエヴィチ大学から京都産業大学へ留学中のアルフレト・マイエヴィチがピウスツキの手になる古蠟管に関する論文を北方文化研究施設の紀要へ投稿してきた(「B. ピウスツキの未発表アイヌ関係資料」北方文化研究, 11号, 1977年)。この論文にいたく興味をそそられた黒田はピウスツキ蠟管の国際的共同研究の構想を漠然と描き始めたい。というのもピウスツキの業績はバチエラーのそれと共に我が国でも比較的多く紹介されている上、ブロニスワフ・ピウスツキの弟は1918年ポーランドを独立に導きヴィスワ川で圧倒的に優勢な赤軍を撃破したユゼフ・ピウスツキ将軍に他ならない。また朽ちかけた蠟管の復元は学際的研究の格好の素材ではなかろうか。

1981年4月黒田は国際交流基金の助成でソ連へ出張した帰路、ポーランドのポズナニ市へ立寄り、件のピウスツキ蠟管が保管されているアダム・ミツキエヴィチ大学を訪問する。同学の言語学研究所には上記論文の寄稿者マイエヴィチが所属していたが、第二次大戦後このピウスツキ蠟管を組織的に取上げ磁気テープへの録音を試みたのは当時研究所長の職にあったイエジ・バインチェロフスキである。彼は1964年に発表した論文「Zapisy fonograficzne Ajnów (アイヌの蠟管蓄音機録音)」(*Biuletyn fonograficzny*, 6)においてサハリンからポズナニに至る蠟管の数奇な運命の旅路を遡り、蠟管を取めたケースの蓋の上書きから録音内容を13種に分類し、更に蠟管蓄音機での再生の試みにも触れている。(なお、バインチェロフスキのこの間の研究については以下に詳述されている。J. Bańcerowski; "On Discovery and First Attempts at Rerecording B.

Piłsudski's Ainu Phonographic Materials”, Proceedings of The International Symposium on Pilsudski's Phonographic Records and The Ainu Culture, Sapporo, 1985)

黒田はバインチェロフスキの案内で蠟管の保管されている物理学実験室の倉庫に赴く。この実験室は古い録音資料の再生や音響学的研究をしている「蠟管蓄音機学科」に属しており、1953年頃ヤギェウオ大学の言語学教授ニツチュの指示で、クラクフの古代ポーランド語辞典編集室で発見された蠟管の受入れ先になっていたのである。今世紀屈指のアイヌ言語資料という黒田の思い入れにもかかわらず、ダンボール箱にほこりまみれで放置されている73個の蠟管を前にして彼は愕然とするのだが、バインチェロフスキの方は、日本のエレクトロニクス技術を駆使した蠟管再生のための共同研究という黒田の提案に快諾を与えている。

ポーランドから帰国した黒田はこの共同研究の実現に向けて精力的に動き出す。なかでも北大の応用電気研究所教授の朝倉利光との出会いは、蠟管再生のための技術チームの編成への展望が開けただけでなく、朝倉の政治力による多額の資金調達とマスコミへの宣伝工作の開始へ弾みをつけるのである。[以後、蠟管再生に関する新聞雑誌等に掲載された膨大な記事については朝倉と伊福部達編集の「ピウスツキ録音蠟管研究の歩み」(北大応用電気研究所, 1986年)を参照のこと]また、黒田は井上紘一等と共に非公式な研究母体であるCRAP(Committee for Restoration and Assessment of B. Piłsudski's Life and Works ピウスツキ未刊資料復元評価の委員会)を結成する。ただ「CRAP」という語が「排泄物」を意味する卑語であることを失念していたのはご愛敬というべきだろう。もっともマイエヴィチを介してのポーランドとの交渉が進捗し、CRAPは国際委員会として認知されるところとなり、めでたく「International」を冠して「ICRAP」となるのである。

1982年秋から翌年にかけてICRAPの組織は黒田の思惑を越えて膨脹していった。彼が国立民族学博物館へこの研究計画を持込んだことで、公的な事務局は同館に置かれることになり、組織代表者にやはり博物館教授の加藤九祚が就任する。かくして頻繁に国際シンポジウムの実現をめざしての協議、研究の集会在民博や北大で開かれるが、黒田の仕事は一向に軽減される気配はなかった。1982年和田は黒田に請われて放送文化基金の助成の可能性を打診するためにNHKへ同行した。羽田への機中で黒田はひどく疲れた様子で「ピウスツキからそろそろ手を引きたい」とこぼしていたが、この時出会ったディレクターの山岸嵩とは特別番組の制作へ向け精力的に協力する羽目になるのである。[山岸は「ユーカラ沈黙の80年」(1984年6月25日放送)、「カラフト・アイヌ望郷の声」(1985年10月14日放送)の制作に携わる]

1983年、すでに中部工業大学へ転出していた同僚の井上はポーランドへ出国し、北海道新聞の記者先川信一郎と共にピウスツキの足跡を辿っていた。彼等が、1930年に偶然100個の蠟管が発見されたザコパネのピウスツキ晩年の下宿を訪ねたり、クラクフの国立図書館で数多くのピウスツキ関連資料を発見したといったニュースは、雑用に追われる黒田にとって羨望的であったかもしれない。その間ポーランドでは同国滞在中の吉上昭三等の尽力で蠟管の北大への移送が行われた。ただし1983年7月に北大の応用電気研究所へ到着した時には蠟管の数は破損等で65個に減少している。1984年春には、黒田の努力の甲斐もあってミツキエヴィチ大学のマイエヴィチに日本学術振興会から助成が下り、北方文化研究施設での翌春までの滞在が実現する。こうした黒田に始まるピウスツキ研究の着々たる準備の歩みを背に、同年10月和田もまた文部省の在外研究員としてアダム・ミツキエヴィチ大学へ長期出張することになる。

1985年夏和田が帰国した時には、「B. ピウスツキ古蠟管とアイヌ文化」と題する国際シンポジ

ウムの用意万端が整っていた。同年9月16日から20日まで北大で催されたシンポジウムでは、外国人研究者19名を含む146名の参加者と新聞社やテレビ局関係者が会場の学術交流会館を埋め尽くし、まさにピウスツキの祭典といった趣であった。この折、テレビのレポーターまでこなしていた黒田の活躍は、和田の目には涙ぐましいサービスぶりに写ったのである。

5日間のシンポジウムが終わると祭りの後のような空しさが漂う。シンポジウムの成果を纏める作業は、黒田の手を離れて民博の小谷凱宣の手に委ねられる。有能な小谷は繁雑な発表資料を450頁余の研究報告「ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究」(国立民族学博物館研究報告別冊, 5号, 1987年)として加藤九祚との連名で編集する。以後もピウスツキ研究は、ポーランドでのマイェヴィチの「ピウスツキ全集」完成へ向けての一連の努力、バインチェロフスキが1987年から翌年にかけて小樽商科大学で和田と共同で行ったピウスツキ草稿の復元作業(和田完, バインチェロフスキ, J. 「B. Piłsudski の草稿アイヌの祈り」北方文化研究, 20号, 1988年), 1991年10月にユージノサハリンスク郷土博物館で開催された「B. ピウスツキ生誕125周年記念国際シンポジウム」等々と綿々と続いてはいる。しかし黒田のピウスツキへの関心は件のシンポジウムが終わった時点で燃尽きていたように思う。いや, このシンポジウム実現に至るまでの心身の疲労と必ずしも快適ではなかった感情的しこりが, この問題との訣別を急がせていたのかもしれない。

黒田は1986年夏には中国内モンゴル自治区への予備調査旅行を開始し, 1988年に文部省科学研究費の助成をえてエヴェンキ族調査の研究代表者になっている。しかし, この頃から彼の行動にはピウスツキ蠟管の発掘で示した, あの卓抜した斉一性や持続性が影を潜めていったようだ。1989年からソ連ハバロフスク州へと調査地が変わるが, 小樽商科大学の津曲敏郎や大阪大学の佐々木史郎等の共同研究者を率いて調査を続行することはもはや不可能にみえた。彼に会うと彼自身が「アルコール依存である」とか「抑うつ反応である」とか「追跡妄想がある」とかいう言葉を頻繁に口にするようになったのもこの頃であった。

1991年12月初旬, 北海道民族学会の研究会が忘年会を兼ねて小樽で開かれた。珍しく大学の研究会場に姿を見せた黒田は宴会場に当てられたレストランにまで同行する。挨拶を請うと自らを「うつ病」と称して乾杯の酒を飲干すでもなく会を辞した。和田は宴会を中座して黒田を車に乗せ南小樽の駅まで送る。いつものように軽口を叩こうとする黒田の寂しそうな後ろ姿を見送ったのが彼を見る最後となってしまった。1992年元旦, 黒田からの年賀状が届いて間もなく, 彼の失踪の噂を耳にする。そして3月黒田の自殺体が手稲山の山麓で発見されるのである。

1887年のサハリン流刑に始まるプロニスワフ・ピウスツキの流転の生涯は, セーナ河への投身自殺で幕を閉じた。黒田の自殺が, このピウスツキの死と重なり合うのは彼を知る何人にも共通する思いであるだろう。最近, 黒田の畏友井上紘一が翻訳したコヴァルスキの描くピウスツキ最後の情景を次に引用し, 黒田の早世を悼みつつ本論の結びに代えることとしよう。

『(1918年) 5月17日, プロニスワフは早朝に起床して, ブルヴァール・サン・ミシェルに住む一人の友人宅に立ち寄った。家の主が留守だったので, ピウスツキは彼宛てに次のようなメモを残した。「命を断つため, あなたに注射をお願いしたくて来ました。私にかけられた嫌疑に対して, 私は潔白です……。」

11時15分, セーナ河に架かる橋ボン・デ・ザールの近くで立哨中の警備員が一人の男を認めた。その男は外套を脱いで, それを河に投げ捨てた。その後に男も飛び込んだ……。救助隊が直ちに出動したが, 捜索は不首尾に終わった——拾い上げたのは外套だけだった。プロニスワフ・ピウ

スツキの遺体が河から引き揚げられたのは、三日後のことだった。彼の友人たちと委員会は盛大な葬式を計画した。フランスの主要な大聖堂であるノートル・ダム寺院にて5月29日に挙行される筈だった。

当日、ノートル・ダムにおける式典は突如——何の説明もなく——取消された。プロニスワフ・ピウスツキの遺骸はモンモランシーのポーランド人墓地へ運ばれた。必要な葬儀を取り行ってくれるポーランド人聖職者も見当たらず、彼を埋葬したのは、土地の教区牧師である。』（ヴィトルド・コヴァルスキ著，井上紘一訳「プロニスワフ・ギネット＝ピウスツキのヨーロッパ遍歴」名古屋，1993年，13頁）